

ホーソーンの「緋文字」における罪の本質と結果について

上 野 征 支*

On the Nature and the Consequences of Sin in *The Scarlet Letter*

Masashi UENO

要 旨

罪の本質とその結果の探究は、常にホーソーン作品における中心課題となっているが、ホーソーンに興味は主として道徳的・心理的なものである。ホーソーンはその代表作「緋文字」において、人間の弱さと悲しみを物語り、罪の道徳的、心理的な結果、すなわち罪のために生ずる感情生活の孤立と疾患、歪曲と抑圧を明らかにしている。ここではそれを三人の主要な登場人物を中心に考察する。

Synopsis

To explore the nature and the consequences of sin is almost always the central subject in N. Hawthorne's works and he is chiefly interested in the moral and psychological world. In his typical work, *The Scarlet Letter*, he tells about human frailty and sorrow, and shows us the moral and psychological results of sin — the isolation and morbidity, the distortion and thwarting of the emotional life. In this paper such problems are studied round three principal characters.

I

ホーソーンの文学的特質は一つにはローマン主義文学、二つには空想の文学と言われる。¹⁾彼の青少年時代はヨーロッパではローマン主義の全盛期であって、早くから文学に親しみ、小説家を志向したホーソーンにとって、その修業時代に影響のあったことや、大学卒業後の12年間孤独な年月を過して、現実社会における体験の乏しかった²⁾ホーソーンが、題材を歴史と架空の世界に求めたことは容易にうなずける。ホーソーンは歴史ものでは、題材をアメリカの植民地時代に求めた。しかも多くはピューリタンの社会であった。ホーソーンは決してピューリタンではなかったが、ピューリタンの社会とその出来事に深い興味を持っていた。それは一つには、人々がまだ超自然的なものを信じ、比喩的、象徴的な発想をしていたこの時代が、彼の文学に最も適していたからであった。ホーソーンは「現実と想像が相合して、各々他のものの持っている性質と融合する」ような「中立地帯」(a neutral territory)³⁾が自分の文学の世界だと述べているが、ピューリタンの時代を作品の舞台にしたとき、彼はこの「中立地帯」を容易に創り出すことができたのである。また人間の内面生活の厳しい省察は、ピューリタニズムの特色の一つであった。⁴⁾人間の内面生活を厳しく眺めたが故に、ピューリタンたちは強烈な罪の意識をもつ人々であり、その社会では、罪は大きな問題であった。ホーソーンはそこに興味をもち、特に心理的、道徳的立場から興味を持ったのである。また、ホーソーン自身も彼の先祖の行為に対して、罪の意識を抱いていたともいわれる。⁵⁾したがって、彼の作品には短篇も長篇もほとんど、罪と罪の意識と良心の問題が主題として取り上げられている。現実社会における体験の乏しいホーソーンは、眼をあまり外部に向けずに、心の内面、内なる世界に向けたのである。そして、そういう世界を描いた代表的な傑作が「緋文字」(*The Scarlet Letter*)である。したがって、この小説の主要なテーマは「罪の道徳的並びに心理的な結果、すなわち罪のために生ずる感情生活の孤立と疾患、歪曲と抑圧」⁶⁾であるとも言われる。以下において「緋文字」に登場する三人の主要人物を中心に、人間の罪とその結果がもたらす心理的、道徳的影響を考察し、作者の罪の意識、人間観にふれてみたいと思う。

* 講師 一般教科

II

「黒ずんだ (sad-colored) 服を着、灰色の先のとがった (gray, steeple-crowned) 帽子をかぶったあごひげ生やした (bearded) 男たちの群れが、あるいは頭巾をかぶり、あるいは何もかぶらずにいる女たちをまじえて、木造の建物 (=監獄) の前に集まっていた。そしてこの建物の扉は樫の木でがっしりと作られていたし (heavily timbered with oak), 大きい鉄釘がいかにめしく打ちつけてあった。 (studded with iron spikes)」⁷⁾ という書き出しで始まっている「緋文字」は、最初から暗く、冷たい作品の基調をかなでており、何らかの罪にまつわるものを感じさせる。しかし、この作品の真の基調は、最後の章で作者がこの物語の内容を簡潔に説明する言葉として結んだ「黒地に、赤い文字 A」(ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES)⁸⁾ に見られるように、これに緋色が加えられるところから生まれ、それはまた、監獄の戸口に咲いている赤いばらの花や、女主人公の胸にいつもついている「緋文字」(the scarlet letter) に象徴されている。

さて、この物語は、作者が「人間の弱さと悲しみの物語」(a tale of human frailty and sorrow)⁹⁾ と述べているように、アメリカがイギリスの植民地であった17世紀のボストンを背景として、ヘスター・プリン (Hester Prynne) という美貌の人妻が、厳格なピューリタンの教会のアーサー・ディムズディル (Arthur Dimmesdale) という若い牧師と姦通の罪を犯し、それがためにそれぞれ違った苦難の道を歩まなければならない物語で、ヘスターが当時のボストンの法律に従って、胸に “Adultery” (姦通) の頭文字 “A” をつけて、市場の処刑台に立つ場面から始まる。

ヘスターとディムズディルが姦通を犯すにいたったいきさつについては、作者はほとんど関心を示していない。ヘスターのように、老いた不具の科学者と愛のない結婚をしてしまった女には、また「弱い存在である人間」には避けられないものと考えたのかもしれない。ここには、ホーソーンにおける原罪の意識が見られるように思う。とにかく、ホーソーンは罪そのものよりも、その責任を重くみるのである。

さて、ヘスターの夫は、オランダのアムステルダムからアメリカへ渡ってくる途中、消息を絶ててしまっていたので、先に到着していたヘスターの罪も本来の死刑を免ぜられて、「緋文字 A」を胸につけて 処刑台に、正午から3時間立つだけで許されることとなった。生まれて3カ月ほどの女の子パール (Pearl) を抱いて、彼女が処刑台に立つとき、姦通の相手の男ディムズディルは彼女が自分の担当教区の教会員であるという理由で、皮肉にも彼女の相手の男の名を告白させる説得の役を総督から命ぜられるのである。当時のニュー・イングランド植民地で、最も尊敬された地位は牧師であったが、その中でも将来を期待されていたのがディムズディルであった。

彼を愛するヘスターは必死に彼の名を隠したため、世のみせしめとして、終身その「緋文字」を胸につけなければならない。自ら告白する勇気のなかったディムズディルは、真実を知らぬ世間の人々の尊敬を一身に集めながら、その後7年という歳月の間、偽善の生活を送ることになる。

一方、ヘスターの夫は、実はインディアンの捕虜となっていたのであるが、丁度、身代金を払って釈放してもらうためにボストンに到着したその日に、皮肉にも妻の姦通を知る。彼は医師としてヘスターに会い、相手の名を聞き出そうとするが、彼女は固く口を閉じる。もともと彼女に愛されていないことを知りながら若い彼女をだました恰好で結婚していた彼は、妻を責める資格はないと悟るが、相手の男だけはなんとしても許すことができない。ヘスターが口を割らないので、いっそう相手の男に対する復讐の念に燃える。そして彼はロージャー・チリングワース (Roger Chillingworth) と名を変え、持前えの鋭い直感からディムズディルに目をつけ、心の苦悩から不思議な病いにとりつかれたこの牧師の治療に当たるという名目で、彼と起居を共にする。ヨハネの黙示録にあるバビロンの「緋色の女」¹⁰⁾ のように、ボストンの町の人々に軽蔑され、疎外されながら、ヘスターは「彼女のもてるすべてで買い求めた」パールと共に、町はずれの海辺にある小さな小屋で、つぐないの生活をしていく。そして特技とする針仕事で得た収入も、パールの養育に使うほかはすべて慈善事業に差し出す。町の人々の彼女に対する評価も次第に変わり、「実行力があり、同情心にとみ、実に有能な女である」ということで、彼女の胸の「緋文字」の“A”は“Able” (有能な)¹¹⁾ とか “Angel” (天使) のそれであると考える者もふえる。彼女はある意味で、なくてはならぬ人となる。彼女の巧みな刺しゅうは、総督のひだえり、軍人の肩帯、牧師のバンド、赤ん坊の帽子など町の人々の衣服を飾る。しかし、ただ一つ「花嫁の清らかな恥じらう顔をおおうべき純白のヴェールのふちどりを手伝うこと」だけは許

されない。当然のこととはいえ、やはり彼女の罪に対する社会の冷酷なまでの俊敏さを如実に物語っており、ここに、ピューリタンの頑迷な不寛容の精神・形式主義などに対する作者のアイロニカルな批判が見られるように思う。しかし、罪の告白をなしえず、偽善者として、次第に自らの魂と肉体を罪の意識のために、枯渇させていったディムズディルは、いっそうチリングワースの疑惑を増し、彼のいけにえとなってしまう。この老医師は、ファウストのような聡明さと知識を持って、決して相手に気づかれないような配慮のもとに、「親切なる友情にとむ医師」として患者の心の奥に深くはいって、秘密をあばき出そうとする。そしてついに牧師の胸の秘密を探り当ててからは、いっそう邪悪になり、牧師を思いのままに、悩む心のうずきで苦しめる。チリングワースはまさに悪魔の化身となりはてるのである。

一方、ディムズディルはこの医師に対して、漠然とした恐怖感や悪意を感じるが、その原因がわからない。かえって、医師に悪感情を抱く自分を責めるのである。

いつしか、7年の歳月がたち、ヘスターはたまたま密かな苦行をしているディムズディルに出会い、彼が思いのほか衰弱しきっているのを見て驚くとともに、自責の念にかられる。チリングワースに彼を許してくれるよう頼むが、きき入れられない彼女は、これまでチリングワースから脅迫されて、その素性を口外しないことを誓わせられていたために、ディムズディルに事実を告げずにきたのであるが、ついに決心して、ある日森の中で、説教から帰るディムズディルを待ち、事実を話して許しをこう。このときの牧師の驚きと怒りに燃えた顔は、彼女がこれまでに見たことがない陰悪で、凶悪なものだった。絶望した牧師をみて、彼女は親子三人で、どこかの外国へ脱出することを説得し、牧師もついに同意する。そして総督選挙の祝日を脱出の日と決め、彼女はたまたまボストンに入港していた船の船長に頼み、脱出の準備は整った。新しい総督が選ばれ、その祝賀説教という最高の榮譽がディムズディルに与えられることになった。いよいよ祝日となり、説教が大成功のうちに終えて、町の有力者と行列を作って進むディムズディルを、彼女はかつての処刑台の近くでパールと共に待っていた。そしてチリングワースが彼らの船に同じく船室の予約をしているのを知ったのはその時であった。しかし行列の中のディムズディルの顔は何と蒼白なことであろう。しかも母親の手を求めて歩くみどり児のように、何とおぼつかない足どりであろう。しかも彼は歩き続けて処刑台のそばにたどり着き、ヘスターとパールを呼び、ヘスターの反対を押し切って、彼女の手を借り、パールの手を引いて、処刑台へと登ったのである。人々の驚きの中で、彼の告白は終わった。そして彼はヘスターのひざにその頭を支えられ、神に感謝しつつ息絶えるのである。チリングワースは彼の告白を必死に阻止しようとした。彼の復讐の相手を失うからである。しかし遅すぎた。かくして、「罪と悲しみの劇」(the drama of guilt and sorrow)¹⁸は終わったのである。

ヘスターとパールは、その後ボストンから姿を消した。チリングワースはまるで生きる目的のすべてが復讐にあったかのように、その後急激に体がおとろえて、「引き抜かれた雑草が日に当って萎れてしまうように」死んだ。彼は遺言で、その全財産をパールに与えた。それから十数年たったある日、海岸にぼんと建っていたヘスターの昔の田舎家に、一人の老婦人が住むようになった。ヘスターが戻ったのである。パールはいなかった。ただヘスターのもとには、ときどきヨーロッパ風の高価な飾り物や、高貴な身分を表わす紋章入りの手紙が来るのであった。おそらくパールはヨーロッパの身分ある人と結婚したのであろう。ヘスターはボストンに戻ってから、不幸な婦人の相談相手となって余生を送った。彼女は娘の家で安楽に暮してもよかったのに、かつてのボストンの海岸の家を選んだのである。彼女は人々に愛されて死んだが、古びたディムズディルの墓と並んで埋葬されることは許されなかった。そして彼女の墓石には「黒地に、赤い文字A」が燃えるように刻まれていたというのである。

不倫とはいえ、若い恋人同志が登場しながら、愛の語らいは描かれず、それぞれ自分との孤独な戦いを続ける。ホーソーンは不倫を責めているのではない。それはピューリタンの社会のことである。彼は人を愛することの苦しさや厳しさを語っているのである。

そして善と悪、愛と憎しみ、高貴なものと、醜いもの、といった異質的なものが微妙に入りまじった状況において、罪にもがき、苦しむところに、人間の真実の姿をみているのではなかろうか。

III

さて、ホーソーンは「緋文字」において、これら三人の人物の中にどのような罪の姿をとらえているので

あろうか。ホーソーンはこの物語において、“the revealed sin of Hester”（知れ渡った罪），“the concealed sin of Dimmesdale”（隠された罪），“the unpardonable sin of Chillingworth”（許すことのできない罪）という三つの罪を取り扱ったと言われている。¹⁴⁾ヘスターが姦通の罪を犯したのは明らかである。それは「罪深い情熱の燃えさかる中から生まれてきた」¹⁵⁾パールが生きた証拠となっている。そして姦通罪の故に社会の掟によって厳しく罰せられ、つぐないの生涯を送るのである。ディムズディルもまた同罪である。彼は姦通の相手として処刑されるべきところを卑怯にも責任を回避して、世間の人々を欺くという偽瞞の罪を重ねている。チリングワースは悪魔的な復讐の罪を犯している。またヘスターは、人々に対して不義の相手の名を、ディムズディルに対してチリングワースの素性を隠すという罪を犯している。この隠蔽の罪はディムズディルにも、チリングワースにも見られる。またディムズディルは、それが「罪と知りながら自ら進んで犯す罪」¹⁶⁾を犯していることにもなる。さらにまたチリングワースがヘスターに自分の素性の秘密を守らせるのは脅迫の罪にならないであろうか。そして最初の場面で、ヘスターの説得役にされたディムズディルの主体性のない言葉にさえ脅迫めいたものが感じられるのである。¹⁷⁾

このように姦通の事件を契機として三人はさまざまな罪を重ねていくのであるが、ホーソーンはいったいどういう罪に重点をおいているのであろうか。まず、姦通の罪についてはそれほど重視していないと思われる。それは前述の理由のほかに、「私たちのしたことに、それなりに神聖さがありました。」¹⁸⁾というヘスターの言葉や作者がディムズディルについて説明した「これは情熱にかられた結果の罪であって、確信して犯したもので、目的あって犯したものでなかった。」¹⁹⁾という言葉からもうかがい知れよう。したがって、あれほどの復讐の悪鬼になったチリングワースが責任の一半は自分の不心得にあったとして、初めからあっさり彼女を許しているのである。彼がディムズディルを許せなかったのは、ディムズディルが卑怯にも責任を回避したからである。

ところで、この情熱云々という説明には、この物語に作者の原罪の意識が含まれていることが現われているように思われる。禁断の実を食べて楽園を追われたアダムのように、ピューリタンの社会から追放されたヘスターを描こうとしたのではなかろうか。とにかくホーソーンは罪そのものよりも罪に対する責任を重視して、ヘスターを罰し、一生涯罪の印である「緋文字」をつけさせたのであろう。したがって、当然立つべき所に立って罪の告白をなしえなかった偽善者ディムズディルの罪の意識、良心の苛責は極めて大きいのである。作者はこの牧師に「自分はまったく卑劣なもの、卑劣きわまるものの中で最も卑劣なもの、罪人の中でも極悪なものである。」²⁰⁾という自責の言葉を語らせているように、ディムズディルの罪が極めて重いものであると考えていたのは明らかである。そしてこの言葉も聴衆には文字通りに受け取られず、かえって自分たちのいっさいの罪をかぶってくれようとする「神のごとき青年牧師、現世の聖人」²¹⁾であるとして、ますます尊敬されることは、彼の煩悶と悲劇性をいっそう大きくしているのである。また真実の愛情を求めるパールの鋭い言葉にも悩まされるのである。そしてこの意志薄弱な牧師は、断食やその他の苦行を行なって救いを求めるが、最後にいっさいを告白するまでは救われない。

しかしホーソーンは、この牧師の罪よりももっと重く赦しがたい罪をチリングワースの中にみているのである。それは森の場面ですべてを知ったときディムズディルがヘスターに語った言葉、「ぼくたちは世界中で最悪の罪人じゃない。心の汚れた牧師よりずっと悪い人間がいる。あの老人の復讐はぼくの罪よりずっと悪質なものだった。あの老人は冷酷な心で、人間の心の神聖さをけがしているのだ。(He has violated, in cold blood, the sanctity of a human heart.) おまえもぼくも決してそんなことはしなかった。」²²⁾に表わされている。

不当に傷つけられたチリングワースが、自首もせず何ら責任をとろうとしない相手の男に対して憤りを感じ、復讐の念を持つのは、人間の心情としていくらか理解できるし、また真相を究明しようとするのは当然のこととも言える。しかしホーソーンが問題としたのは、チリングワースの復讐心そのものというよりむしろ、その邪悪な復讐の手段にあったのである。それは「相手を法のもてで裁くことでも、生命を奪うことでも、名声を傷つけることでもなく」²³⁾相手の魂を地獄に落すこと、すなわち「相手の苦悩に満ちた心をたえず分析し、その激しい苦悩に油を注ぎ、そして冷笑して眺める」²⁴⁾ことである。このことを作者は次のようにも述べている。

“To make himself the one trusted, to whom should be confided all the fear, remorse, the agony, the

ineffectual repentance, the backward rush of sinful thoughts, expelled in vain! All that guilty sorrow, hidden from the world, whose great heart would have pitied and forgiven, to be revealed to him, the Pitiless, to him, the Unforgiving! All that dark treasure to be lavished on the very man, to whom nothing else could so adequately pay the debt of vengeance!”²⁵⁾

要するに、これは作者がディムズディルに言わせた「人間の心の神聖さをけがすこと」であり、人間性をまったく無視することなのである。ホーソーンはこの人間性にもとる行為を最も重い「赦しがたい罪」(the unpardonable sin) とみなしているのである。そしてこの「赦しがたい罪」は、ホーソーン文学の主要なテーマの一つとなっているのである。

次に、このような罪がどのような結果をもたらすとホーソーンは考えるのであろうか。それは恐るべき孤立である。外面的には社会から追放され、内面的には自己を疎外することになるのである。

罪の結果ヘスターはピューリタンの社会の片すみで暮らすことになり、しかも「彼女と世間との交渉の点からみても、自分がこの世間の一人であると彼女に思わせるようなものは一つもなかった……彼女は追放された。」²⁶⁾のである。そして「彼女は社会と自分とをつないでいる鎖の断片をすら投げ捨ててしまって、世間の掟は彼女の心には掟とはならなくなった」²⁷⁾のである。またその結果は、さらに彼女をして「大西洋の彼岸ヨーロッパではごく当りまえのことであったが、彼らの祖先が、「緋文字」に表わされている罪よりももっと重大な罪と考えていたと思われる思索の自由 (a freedom of speculation) を身につける」²⁸⁾という危険に陥らせるのである。しかしこれはまた、頑迷偏狭なピューリタンの社会からの開放が、かえって彼女に真の人間らしさをもたらしたのだという逆説とも考えられ、個人を尊重するローマン主義の影響を見せられているように思われる。

ディムズディルの場合にも、表面上の言行にもかかわらず、「だれのことも自分の友人として信じることをしなかった。」²⁹⁾と説明されているように、内面的には孤立しているのである。また不義をはたらいた女の夫が受ける恥を受けたくないからとはいえ、復讐の完遂のために「人に知られずに生活し、死んでいくことがぼくの目的なのだ。」³⁰⁾というチリングワースは、自ら孤立していくのである。

ホーソーンは『イーサン・ブランド』(*Ethan Brand*)という短篇で、「赦しがたい罪」について、その主人公に次のように説明させている。

“The sin of an intellect that triumphed over the sense of brotherhood with man and reverence for God and, sacrificed everything to its own mighty claims!”³¹⁾ The only sin that deserves a recompense of immortal agony!

つまり、これは知と情の不均衡が人間の共感を奪い、人間を社会から孤立させ、その孤立は人間をますますエゴイストにしていくということなのである。これはホーソーンの世界を貫いている罪の思想の中核ともいえるものである。³²⁾

いま一つ罪の結果についてみると、「社会からの孤立」が罪の外面的客観的な報いであるとすれば、「魂の汚点」は個人の罪の内的主観的な報いであるといえよう。³³⁾ ホーソーンは「罪が一度人間の魂につくった傷は二度とつぐなえないものである」ということは、厳しく悲しい真理である。³⁴⁾と述べている。心から愛すればこそ、秘密を守り、同じ地に留まって、すべてを犠牲にした生活を送り、彼のために海外逃亡策を立ててやったヘスターが、最後の場面で、せめて来世において、「永遠の生命を共に すごせないか」³⁵⁾という願いを、ディムズディルに否定され、「死後も二つの墓はへだてられていた。」³⁶⁾というのは何と悲しいことであらうか。ここには冷厳なピューリタンの態度とともに、ホーソーンの悲劇的な人間観が表わされているように思われる。ホーソーンの悲劇的人間観はまた、「幸運な墮落」(fortunate fall) の思想からきていると思われる。「わたしの苦しみの中に神はそのめぐみをあらわしたもうた。」³⁷⁾と述べたディムズディルの臨終の言葉の中にそれが暗示されている。罪ゆえにディムズディルは、よりいっそう人間同胞に心からの同情を抱くようになっていったし、また最後の昇天のさまには救世主の姿を思わせるものがある。そしてヘスターが懺悔の生活のために戻ってきて、自分自身の利益や快楽を求めず、すべて勤労と反省と献身の生活を続け、人徳すぐれた女性として尊敬されるほど高まったのは、最初に罪を犯してしまったからではないだろうか。

一方、ホーソーンは罪の苦しみからの救いは、単なる「苦行」(penance) によってではなく、「懺悔」(penitence or repentance), 告白 (confession) によってのみなされると考えている。それは「あなたはもう深く悔い改めていられしやる。あなたの罪は背後にすてられています。ずっとずっと過去のものです。」³⁸⁾と

いうヘスターに対して言うディムズデイルの言葉、「この悔い改めには実質がない。…悔悟の苦行はぼくは十分しつくした！ 懺悔は何もしていないのだ！」³⁹⁾に表明されている。ディムズデイルは最後に公けの前で処刑台に登り、懺悔、告白してはじめて救われたというのである。またヘスターが後に再びこの地に戻るのには、ここに愛する牧師が眠っているからだけでなく、真の「懺悔の生活」が残っていたからと考えられる。そして「自分は悪魔だ！ しかしだれがそうしたのだ。」⁴⁰⁾ といって最後まで懺悔のないチリングワースは、「引き抜かれた雑草が日向で萎れてしまうように消え去る」のである。ここで大事なことは、これらのことが、他人から強制されてしたり、またかげで密かにするものではなくて、人々の前で自発的にすべきものであるということである。それは結末で、ディムズデイルの教訓として語られている言葉、“Be true! Be true! Be true! Show freely to the world, if not your worst, yet some trait whereby the worst may be inferred!”⁴¹⁾に表明されている。ここにも社会からの孤立を恐れ、社会を重視したホーソーンの状態がみえるように思われる。人々が互いに真実のうちに心の中を打明けられない限り、真の社会はありえないと訴えているのではなかろうか。これはまた、若いときから社交的な人間になりたいと願っていたというホーソーンの自戒の気持を反映するものでもあろう。

さてホーソーンは、精神の事象はすべて外界の物質で象徴されと考えている。この考えはディムズデイルに対するチリングワースの言葉、「体の病気は、われわれはそれが病気の全部だと思っていますが、結局は精神的方面の悩みの一つの徴候にすぎないこともあるのです。……体は精神の道具ですからね。」⁴²⁾の中に明らかにされている。実際、ディムズデイルの肉体の日々の衰えは、彼が罪を告白しえず、たえずもだえにもだえている彼の心の姿を象徴しているのである。またチリングワース自身についても、年とともに体が醜く変っていったのは、彼の心の邪悪さがいっそう深まったことを象徴しているのである。「緋文字」は単に不義の象徴としてヘスターの胸に燃えるように、焼きつけられていただけでなく、さらに良心の苛責に烈しくせめられ、たえず胸に手を当てているディムズデイルの胸にも、いつしか象徴として育っていくのである。またヘスターとディムズデイルが、夜に密かに処刑台に立ったときも、空に流星が不吉の象徴として「緋文字A」を描き出すのである。そして罪と罪の意識の象徴である「緋文字」はそれる眺める者の心の中のさまざまな意識を表わすものとなる。たとえば、ヘスターに慈悲深い情けを感じる者は、それを天使の象徴とみなすというふうな。

これまでみてきたように、「緋文字」は作者がその序章「税関」で述べているように、17世紀のアメリカの植民地時代の史実にもとづいて書かれたものであるが、決して単なる歴史小説ではなく、単にピューリタンの社会を批判したものでもない。それは「人間の弱さと悲しみの物語」を中心にして、罪とその結果、人間の心理的、道徳的、宗教的情况を探究したものであり、人間性の尊重と社会生活の重要性などを語るものである。これは人間にとって永遠の問題なのである。以上は罪の問題の面からみた一面的な所感にすぎないが、ホーソーンは少くともこういったことを含めて、自分の心のすべての象徴として「緋文字」を生み出したのではないだろうか。

(註)

- 1) 坂本重武著、ホーソーンの文学、昭和43年、竹村出版 p.p. 21—22
- 2) Henry James: Hawthorne. Great Seal Books A Division of Cornell University Press. 1956 p. 21
- 3) ホーソーンは「緋文字」の序である「税関」でこの作品の創作態度を説明している。
- 4) 大下尚一編、講座アメリカの文化Ⅰ、ピューリタニズムとアメリカ 1969年、南雲堂 p. 253
- 5) Hyatt H. Waggoner: Nathaniel Hawthorne. 1962, University of Minnesota Press. Minneapolis p. 5
- 6) Richard Chase: The American Novel And Its Tradition, 1957 A Doubleday Anchor Original p. 72
- 7) The Centenary Edition of The Works Of Nathaniel Hawthorne Volume 1. The Scarlet Letter 1962 Ohio State University Press (以下 The Centenary Hawthorne I と略す) p. 47 (≒は筆者)
- 8) Ibid., p. 264
- 9) Ibid., p. 48
- 10) Ibid., p. 110 なお作者はヨハネの黙示録(第17章4)にある “And the woman was arrayed in purple and scarlet, and decked with gold and precious stone and pearls, having in her hand a golden cup full of abominations, even the unclean things of her fornication,”—The New Testament. American Standard Version and Japanese Colloquial Version. (1957年日本聖書協会刊) p. 775 を想起していたものと思われる

る。(——は筆者)

- 11) Ibid., p. 161
- 12) Ibid., p. 158
- 13) Ibid., p. 253
- 14) 坂本重武著, ホーソーンの文学 p. 54
- 15) The Centenary Hawthorne I p. 89
- 16) 鈴木重吉著, 鏡と影—ホーソン文学の研究—昭和44年 研究社 p. 78
- 17) The Centenary Hawthorne I, p. 67 特に “If thou feelest it to be for thy soul’s peace, and that thy earthly punishment will thereby be made more effectual to saluation, I charge thee to speak out the name of thy fellow-sinner and fellow-sufferer!” のくだりにあると思われる。
- 18) Ibid., p. 195
- 19) Ibid., p. 75
- 20) Ibid., p.p. 143-144
- 21) Ibid., p. 144
- 22) Ibid., p. 195
- 23) Ibid., p.p. 75-76
- 24) Ibid., p. 170
- 25) Ibid., p. 139
- 26) Ibid., p. 84
- 27), 28) Ibid., p. 164
- 29) Ibid., p. 130
- 30) Ibid., p. 76
- 31) Malcol.m Cowley ed. The Portable Hawthorne 1966. New York The Viking Press p. 247
- 32) 小山敏三郎著, ホーソーンの世界, 1967年, 萩 書房 p. 50
- 33) 鈴木重吉著, 鏡と影 p. 87
- 34) The Centenary Hawthorne I p.p. 200-201
- 35) Ibid., p. 256
- 36) Ibid., p. 264
- 37) Ibid., p. 256
- 38) Ibid., p. 191
- 39) Ibid., p. 192
- 40) Ibid., p. 173
- 41) Ibid., p. 260
- 42) Ibid., p. 136

(昭和46年1月11日受理)

